

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2013年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学専攻
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻・ 博士課程後期課程5年	滝上 裕子 印	
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・特任教授	林 淑美 印	
自然・人文・ 社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題名	昭和初年における小説と文芸批評の射程—小林秀雄の初期創作を通じて—		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻・ 博士課程後期課程5年	滝上 裕子	
研究期間	2013 年度		
研究経費	(支出金額) 179 千円 / (採択金額) 200 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、小林秀雄の昭和初期における創作活動を対象とし、近代批評の確立という問題を小説作品との関わりから探求するものである。日本の近代化が進められるなかで、批評行為もまた行われてきたが、昭和初期に文壇に登場した小林秀雄が日本の<近代批評>の祖として今日までとらえ続けられてきた。本研究ではその批評家として成った問題意識の編成を、同時代に交流のあった文学者による草稿調査や、同人誌・文芸誌の特色などの側面をとらえ考察する。のちに<近代>ととらえられる問題の編成と変遷を、小林が文学的出発点において小説創作を行っていたこと、詩や小説の翻訳を行っていたことを文芸時評連載と並列したものととらえなおすことで、近代批評文学の問題として考察したい。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[批評文学] [小林秀雄] [同人雑誌]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、小林秀雄の昭和初期における創作活動を対象とし、近代批評の確立という問題を小説作品との関わりから探求するものである。明治時代以降、日本の近代化が進められるなかで批評行為もまた行われてきた。近世においても批評文学はあったが、文芸批評としてひとつのジャンルとみなされたのはやはり明治時代以降であり、北村透谷や島村抱月の活動が注目される。一方、小林秀雄が文壇に登場したのは昭和 4 年 9 月「様々なる意匠」(「改造」)である。昭和初期に登場した小林秀雄が日本の〈近代批評〉の祖として今日までとらえ続けられてきた。小林秀雄の作品について考察することは、日本文学における近代化の問題を考察することである。

小林秀雄は歌論や俳論、能楽や演劇における評論といった近世以前の評論と一線を画し、島村抱月から続く文芸批評を、批評もまた独立した文学作品となりうるという水準に引きあげた。これは小林が読んできたヴァレリイをはじめボードレールなど、西洋の詩人は同時に批評家でもあるということの影響下にあると考えられる。

昭和初期において日本の文壇は「三派鼎立」の時代だったが、小林秀雄はマルクス主義文学の批判者としてとらえられた。そのため芸術派の文学者たちに特に好んでむかえられたが、小林が批判したのは政治の優位性、無批判で盲目的なマルクス主義者の態度であり、マルクスやレーニンの哲学を全面的に否定したわけではなかった。一方で、文学という人間をみる芸術の独立を重視した。小林が〈近代批評〉の祖とされるひとつの理由がここに見いだせる。文学の独立という、人間という個の存在を描く芸術の独創性をめざす志向をうちだすことになったのである。

芥川龍之介は「人生は一行のボオドレエルにも若かない」(『或る阿呆の一生』)と書いたが、磯田光一(「日本的近代の逆説」、『昭和批評体系』昭和 43 年 5 月)は、このボードレールに西洋という要素と世俗との距離に大正期における日本的な理想主義をよみ、この理想主義への本質的懐疑が文学史における昭和時代のはじまりであったとする。日本における近代化とは西洋化という要素が多分にあったが、それは近世以降続く生活様式にとっては異質なものであった。文学では、明治期の翻訳・翻案文学にそれらと同じある種の混乱がよみとれるが、夏目漱石をはじめ外国文学に接した文学者が次第に西洋的な個のあり方を学び身につけようとしつつ違和感をもつようになった。小林秀雄が文壇に登場したときに主張したのはこれらへの立場だったといえる。小林は、東京帝大仏文科を卒業しているが、ヴァレリイやラシーヌを読むだけでなく、ボードレール、ランボオ、ジイドなどの翻訳を学生時代からおこなっていた。それらの作品による影響の大きさは「ランボオ」ⅠⅡⅢや後の対談などで繰り返しべられている。大正末期から昭和初期にこれら西洋文学における個のあり方に小林がみたものは、後に「私小説論」へと繋げられていく。つまり、大正期までにみられた個人とは何かといった問いが重要なのではなく、個人をいかに存在させるのが重要であり、個人とは社会との関わりを避けられないが、文学においてそれは社会的に有効な哲学を絶対的法則のように下敷きとすることでえられるものではない。むしろ、文学において個人が表出されるのは散文的精神や詩的精神の芸術的独創性を作者がいかにもっているか、そしてそれが社会性によって鍛えられているかによる、ということを導いた。

ここで問われねばならないのは、これらの同時代性である。「様々なる意匠」において批判された近代的個人のあり方が、「私小説論」(「経済往来」昭和 10 年 5~8 月)においてあらためて文壇の問題を明らかにしながら論じられたのだが、平野謙(『昭和文学私論』昭和 52 年 3 月)は「私は昭和十年前後の文芸思潮を代表するものとして、かねがね小林秀雄の『私小説論』をあげたいと思っている。」とのべた。あえて指摘してみせることは「私小説論」が同時代において今日ほど重要視されていなかったことを暗に示してはいないだろうか。あらためて振り返ってみれば、「私小説論」は同年発表された横光利一「純粹小説論」に対する返答でもあった。山本芳明(「〈私小説〉言説に関する覚書—〈文学史〉・マルクス主義・小林秀雄—」、『学習院大学研究年報』平成 23 年 3 月)は「私小説論」に展開される私小説の定義とそれまでの定義との問題をたどりながら、小林のとらえ方は当時のステレオタイプであり「おそらく、ステレオタイプであるからこそ、第 2 次世界大戦

研究成果の概要 つづき

後に「私小説論」はヘゲモニーを握ったとあってよいのではないだろうか。」と指摘し、「私小説論」末尾の解釈を通じて、当時の小林が横光とは別の文学の〈革命〉をおこそうと考えていたことを論じる。同時代に横光利一の「純粹小説論」がなげかけた問題は文壇に様々な議論を読んだが、横光自身が作家であることが小林秀雄においては「私小説論」を提言するにあたり複雑な問題になっていたと考えられる。

小林秀雄は、はじめから批評家としてその文学活動をはじめたわけではなく小説家を志していた。「蛸の自殺」(「登音」大正 11 年 11 月)、「一つの脳髓」(「青銅時代」大正 13 年 7 月)、「飴」(「青銅時代」大正 13 年 9 月)、「ポンキンの笑ひ」(「山繭」大正 14 年 2 月)、「からくり」(「文学」昭和 5 年 2 月)、「眠られぬ夜」(「古東多万」昭和 6 年 9 月)、「おふえりや遺文」(「改造」昭和 6 年 11 月)、「X への手紙」(「中央公論」昭和 7 年 9 月)と 10 年以上も文芸批評と翻訳作品と並べて発表していた。秋山駿(『魂と意匠—小林秀雄』昭和 60 年 11 月)は「昭和 5 年の『からくり』から昭和 7 年の『X への手紙』にかけて、小林は、第 2 の小説創作の時期にいた。」と分類し、小林がこの時期に「批評の自由」を探求していたことと、若い野心をもっていたことを理由にあげているが、「ポンキンの笑ひ」から「からくり」まで期間があいていること、また小説作品の発表媒体も確認される必要がある。「ポンキンの笑ひ」は改作し「女とポンキン」として昭和 2 年 12 月の「大調和」に掲載された。「大調和」は山川均や柳宗悦、梅原龍三郎など多分野の執筆者による雑誌で武者小路実篤が主催した。この雑誌に小林は「測鉛」などの批評を掲載している。批評を掲載している雑誌に、改作ではあるが小説を掲載したことは小林が批評だけで名をなそうとしていなかったことを示している。その後、ジイドの「パリュード」の翻訳連載をはじめめるが中断する。編集後記をたどると、「毎月連載」から、翌号で予定枚数より短いものとなり、翌々号休載し続稿を約束していたが果たされなかったことがわかる。この中断により、小林は「文藝春秋」に「シャルル・ボオドレエル伝」の連載をはじめている。そして連載終了 2 ヶ月後に「からくり」が「文学」に掲載されるのだが、その「からくり」は昭和 5 年 6 月に「芸術派ヴァラエター」に再掲載されている。「芸術派ヴァラエター」は新興芸術倶楽部による発行で、「からくり」が新しい文学表現を志す小説の一端としてみとめられていたことがわかる。フランス象徴派のボードレールや、その前後に連載したランボオとあわせて、小林はその作品と生涯を丹念に追うなかで日本にまだ実現されていない理想の文学をみてとり、批評的言辞の連載を経て散文的言辞を鍛えて飛躍することをめざしたのだと考えられる。すなわち、秋山が分類する「第 2 の小説創作」にあげられた 2 つの理由は、横光という小説家により理論と実践の問題が提言されたとき、批評的言辞と散文的表現の混交として、日本の近代化批判という形をとりながら、「私小説論」においてようやく決算されることとなったと延長してとらえられる問題だと考えられるのではないか。

後に川端康成(昭和 14 年 2 月「文学界」)は「明治大正の文学は西洋文学のあわただしい移植であった」とし、「小林君等も主としてフランス文学の移植はした」が「西洋文学はなにも移植されてみぬといふことを移植し」「これまでの移植の浅薄さを考へてみせてくれた」のがその功績だとし、「日本に思想小説のないことを、文学的に物を考へる作家の殆どないこと」をあげ小林にその素質をよみとっているが、それに先立ち中原中也は「小林秀雄小論」(生前未発表、推定昭和 2 年頃)で「或時期に至つて魂のこのの方が先になったのです、晩熟しました。」と小林を評している。水野尚(「詩人と批評家—中原中也と小林秀雄—」、「言語と文化」平成 24 年 3 月)は昭和 2 年頃「創造と詩の原理に関して、小林は、考えることから動くことへという思考を鮮明にする。」と分析する。

日本社会の近代化と文学の問題において問われた個人の問題が、昭和初期において西洋化への批判として立ち返るとき近代批評が確立したのだと考えられるが、同時代においてそれらが文学における〈革命〉への目論みの一端であったことは、言論表現と歴史性の問題として考察される必要がある。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)